

## 屏陽義塾の教育活動

### はじめに

屏陽義塾は、咸宜園の門人である柳川竹堂によって、讃岐国三野郡上高瀬村（現香川県三豊市高瀬町）に、明治三年（一八七〇）に開設されて同二九年（一八九六）まで続いた漢学塾である。本稿は、屏陽義塾の入門者や教育課程の検討を通じて同塾の性格を明らかにすることを目的とする。その際に、同塾が、明治前期の咸宜園系譜塾（咸宜園門人が開設した塾）である点に注目する。

明治前期の私塾に関する研究には一定の蓄積がある<sup>(1)</sup>。入江宏は、近代的教育システム、とりわけ中等教育制度が整備されるまでは、私塾が、基礎教養形成の場や予備校的存在として、固有の機能や意義を有したと指摘している。池田雅則は、フォーマルな中等教育機関の不在のなかで、私塾が地域の期待を背負って隆盛したことを、新潟県長善館を事例として明らかにしている。本稿では、入江や池田の研究成果に負いながら、屏陽義塾が果たした役割を、入門者の地域的分布や門人の退塾後の活動に注目することで明らかにしたい。

咸宜園の系譜塾は、九州地方で約七〇、中国・四国地方で二〇近くを確認でき<sup>(2)</sup>、そのほとんどが江戸時代の事例である。先行研究によって詳細のわかるもの<sup>(3)</sup>をみると、それらには咸宜園教育方式が導入されていた。すなわち、三審法と月旦評に基づいた実力主義、厳格な塾則に基づく寄宿舎制、漢詩の重視、といった咸宜園教育の特徴が系譜塾にも取り入れられて各地にひろがっていたようすがうかがえる。これらの方式は、屏陽義塾にも導入されたのだから。同塾については自治体史で概説的に記述されるにとどまり、研究の対象にされてこなかった。本稿では、屏陽義塾の教育活動のみを通して、同塾

に咸宜園教育方式が導入されたのか検証する。

本稿で主に使用する史料は以下のものである。まず、「柳川竹堂関係文書 送柳川竹堂帰郷詩巻」は、竹堂宛ての書簡や、竹堂が咸宜園を退き帰郷する際に塾生から寄せられた詩をまとめたものである。「柳川竹堂入門簿」は、明治三年から同二九年までの入門簿である。「私立学校創置三付伺」（以下「創置伺」と略記）は、明治一六年七月に愛媛県令宛てに提出されたものである。これら三点はいずれも写ししか確認できておらず、原史料の所在は不明である<sup>(4)</sup>。ほかに、竹堂の詩集である『忠恕堂詩艸』<sup>(5)</sup>、頌徳碑<sup>(6)</sup>、竹堂門人である白井要の関連史料（白井家文書）や咸宜園関連史料<sup>(7)</sup>なども使用する。

### 一 柳川竹堂と屏陽義塾

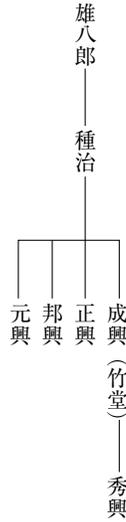
#### (1) 柳川竹堂の経歴

柳川竹堂は、天保二年（一八四一）二月、讃岐国三野郡上高瀬村に生まれた。同村は、丸亀藩領であった。讃岐国は丸亀藩のほか、高松藩と多度津藩によって治められていたが、多度津藩は廃止され、他の二藩は明治四年四月に丸亀県、同年七月に高松県となった。同年一月、二県を合併して香川県が発足した。明治六年二月に名東県（阿波・淡路国）に併合されたが、同八年九月には香川県（第二次）が分離された。同九年八月に愛媛県に併合されてから、同二年一月に香川県（第三次）が独立するまでは、愛媛県讃岐国と呼ばれた。上高瀬村は、高瀬川中流域に位置する農村地帯で、明治八年の戸数は四九三、人口は二三〇七、反別一七七町余であった<sup>(8)</sup>。同二三年、新名村と合併して上

鈴木 理恵

（受理日二〇一七年十月四日）

高瀬村が成立するにあたり、大字となる。  
柳川竹堂は通称を縫之助、諱を成興と云った。竹堂または竹荘と号した。頌徳碑によれば、祖父の代に氏を戸城から柳川に改めている。祖父は丸亀藩に仕えたとされる。父は郷閭の人びとに筆札を教えたことを以て官から表彰されたという。柳川家の略系図は次のようである<sup>9)</sup>。



竹堂の経歴について、「創置伺」に記載された履歴書や頌徳碑の銘文などをもとにまとめれば以下の通りである（一部の年代に誤りがみられるが原史料のまま記述し、修正できる部分については後述する）。竹堂は、安政四年（一八五七）一月から万延元年（一八六〇）六月まで、讃岐国那珂郡榑梨村の秋山惟恭<sup>10)</sup>のもとで漢学を修めた。文久元年（一八六一）一月に豊後国日田の成宜園に入門し、慶応二年（一八六五）九月まで、広瀬青邨と広瀬林外に師事した。帰郷後、慶応二年一月から明治元年（一八六八）二月まで、私宅において学事修業の傍ら、近隣の子どもたちに教授した。明治二年八月から同三年三月までの八か月は、京都清水寺から招聘されて僧侶に教授した。その後帰郷して同三年七月に私宅で私塾を開業して読書を教授し始めた。竹堂は、尊王攘夷をとなえて、各地の志士、西讃の日柳燕石や美馬君田らと親交があったが、王政維新の同志が栄達しても、竹堂は育英を自任して郷里で門人教育に専念したという。同一九年に塾を丸亀に移したが、翌年に郷里に戻した<sup>11)</sup>。若干巻の著書があったとされる。明治三二年八月に五九歳で病歿した。

(2) 成宜園における竹堂

成宜園の入門簿には、文久元年一〇月六日付で「讃州丸亀藩中 柳川縫之助 柳川種治嫡子甘才」<sup>12)</sup>が入門したことが記されている。『成宜園日記』同日条にも現れるので、竹堂の入門日はこれで間違いない。したがって、先にみた「創置伺」の一一月入門という記述は誤りである。入門後の竹堂の動きを『成宜園日記』で追ってみると、いつからかは不明だが文久二年閏八月まで常侍史を勤め、元治元年（一八六四）三月に権六級下に昇ったあと外来長に就いている。成宜園では職任制が設けられ、塾生にさまざまな役割が与えられていた。竹堂が就いた常侍史とは塾主の身のまわりの世話をする係で、外来長とは寄宿生以

外の外来生を担当する役職であった<sup>13)</sup>。竹堂は少なくとも権六級下に進んだことが明らかであるが、六級は月旦九級制のなかで上等生に相当した。

『林外日記』元治元年八月二五日条を最後に「縫之助」の名は成宜園関連史料に現れなくなる。また、竹堂の大婦に際して塾生から寄せられた詩には、「甲子晩秋」や「元治甲子初冬」の年記がある（『送柳川竹堂婦郷詩巻』）から、竹堂は元治甲子（元年）末に日田を去ったものとみられる。そうであれば、竹堂が成宜園に在籍したのは約三年間となる。「創置伺」には竹堂が慶応元年九月まで林外に就いていたと記されていたが、それを裏付ける史料は確認できない。

成宜園は広瀬淡窓によって開設されたが、竹堂が入門した文久元年当時は広瀬青邨が塾主を勤めていたとされる<sup>14)</sup>。青邨は、淡窓の養子で、安政二年（一八五五）から塾主となった。しかし、竹堂の入門直前に青邨は日田を離れた<sup>15)</sup>ため、それ以降、林外が塾政を取り仕切った。また頌徳碑によれば、竹堂は広瀬旭荘にも師事したらしい。旭荘は淡窓の末弟で、林外の実父である。旭荘は天保七年（一八三六）に日田を離れた後、大坂や江戸に住んでいたが、文久元年二月に日田に帰っていた<sup>16)</sup>。翌二年一〇月に再び大坂へ赴き、同三年八月に死去した。旭荘の死を悼む竹堂の詩（『雪来山館奉 悼旭荘先生 用 遺作韻』）が残されており、そこには、旭荘が日田に閑居として建てた雪来山館で詩作にふけていたことや、竹堂が旭荘の談論を聴いたことが記されている<sup>17)</sup>。

(3) 屏陽義塾の位置づけの変遷

竹堂は明治三年七月一八日に上高瀬村の私宅で屏陽義塾を開業したと、「創置伺」に記載されている。入門簿の記載も同日の入門者から始まっていることから、この日を以て同塾が創設されたととらえてよいだろう。以後順調に入門者数を増やしていたが、同六年六月に西讃地方で起きた「竹槍騒動」で竹堂の塾も打ち壊しの被害に遭って、しばらく休業を余儀なくされた<sup>18)</sup>。

愛媛県は明治一〇年七月、私学を開業する者は学区取締の指示を受けたうえで願い出るように布達した。同時に私学開業規則（県達乙第九七号）を定め、願書様式として、学校の位置や名称、学科、教則、校則、教員の履歴や給料、生徒の員数や授業料、学校費用を明記することを求めた<sup>19)</sup>。竹堂もこの布達に応じて願書を提出したのであろう。同一一年一月に私学開業許可を受けている<sup>20)</sup>。私学開業規則では、小学校私学に対しては「其教則上二閏シテ公学一様ノ管理ヲ受クルモノトス」と統制がなされたが、「中学以下ノ諸学科ニ至テハ、現今県内ニ於テ未タ完備ノ規則アラザルヲ以テ暫ク各私学適宜ノ授業法ヲ

行フヲ許ス」とされた<sup>(21)</sup>。そのため、同年および翌一二年の屏陽義塾は「文部省年報」で私立中学校として位置づけられている。しかし、明治一二年教育令および翌年の同令改正によって中学校を一定の基準で統制する方向性が示されると、屏陽義塾は中学校の範疇から外れることになる。そうした学校のために、文部省は明治一三年に「各種学校ノ部類」という種別を設ける方針を定めた。さらに、中学校が備えるべき諸学科を具体的に示して、それらを完備しない場合には「各種学校ノ部類」に入れるように指令した<sup>(22)</sup>。文部省の方針にもとづき、屏陽義塾は各種学校として位置づけられた。

明治一六年七月に竹堂が「創置伺」を愛媛県令に提出したのは、前年一二月の県布達に応じたためであろう。このとき愛媛県は私立学校に対して、設立願いを再提出することを要請し、提出されない場合には廃校とみなすことを示した<sup>(23)</sup>。屏陽義塾は、明治一六年九月に私立学校創置の認可を受けている<sup>(24)</sup>。

「創置伺」には、設置目的、位置、名称、教則、校則、生徒人員、授業料、教員職務心得、教員履歴、学舎敷地及建物、学舎経費、教科書表、学科課程表が掲載されている。屏陽義塾の設置目的は「読書学科」であった。教員は竹堂一人で、生徒は寄宿生四一名と外来生二五名の合計六六名（全男子）に達した。添付された平面図によれば、敷地の南端に建てられた教場は六坪で、その北に寄宿舎二棟が東西に分かれて一〇坪と二〇坪で配置されていた。授業料は入学束修が一円で月謝が三〇銭となっていた。授業料総額三三七円六〇銭を収入として、教員俸給・書籍器械費・営繕費および諸雑費に充てた。

竹堂は明治一九年二月に屏陽義塾を那珂郡丸亀に移し、ここでは漢・英・数三科が教授されたといわれる<sup>(25)</sup>。後述するように移転したのは事実とみて間違いないが、英語や数学が教えられたことを証明する史料は確認できていない。翌年に上高瀬村に戻って明治二九年まで存続したが、この間の教育内容は和漢学であった。明治二五〜二七年の『香川県学事年報』によれば学校設立者は柳川元興、同二八〜三〇年の同年報によれば明治二八・二九年の学校長は三谷幸作となっている。柳川元興は竹堂の弟で、三谷幸作は明治一七年に入門した茂九郎（三野郡大見村）の父親である。学校長が交代した理由は不明である。

## 二 屏陽義塾の性格

### (1) 入門者の分布

屏陽義塾の入門簿には入門者四七八名の名前、年齢、出身村、父兄名、紹介人（明治一九年以降は「保証人」となるが、本稿ではすべてを「紹介人」と表記する）の名が記載されている。その年齢構成は、九歳から三四歳まで幅があるが、一三歳から一七歳の年齢層が多く、なかでも一五歳が約一八%を占めて最多である。平均年齢は一六歳である。明治一六年に屏陽義塾が私立学校として再認可を受けてからは、一〇歳以下の入門例はみられない。「創置伺」中の校則にも「小学適齡ノ者ハ入校ヲ許サス」と記されていた。

入門者数の推移を図1でみると、開設当初順調に増加していたにもかかわらず明治六年から落ち込んでいるのは、先述したように打ち壊し一揆が起きたためであった。その後、入門者数はもちなおして明治一四年から一五年ごろにピークを迎えたものの、同一九年に一時的に急増した以外は、減少の一途をたどった。閉鎖直前の同二八年に、屏陽義塾門人で唯一の女子と思われる「吉田シユウ」が入門しているのは、同塾の性格が変化したことを示唆するが、具体的なことはわからない。

図2は、讃岐国内出身入門者の地域的分布である。三野郡を中心とする西讃に偏る傾向を看取できる。讃岐国外出身者は全期間を通じて三六名で、愛媛（伊予）一〇名、徳島（阿波）一〇名、高知（土佐）四名など四国地方が多いが、九州地方出身者も四名みられる。入門者の地域的分布を教育圏とみるならば、屏陽義塾

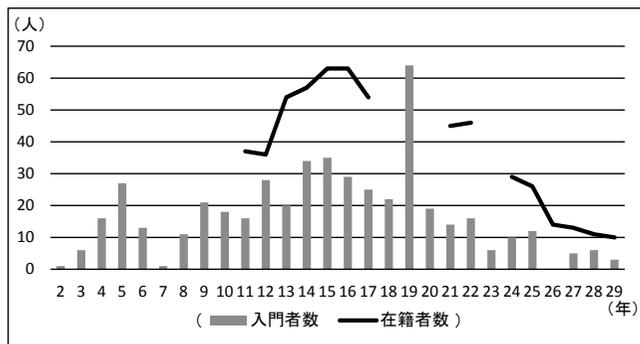


図1 屏陽義塾の入門者数と在籍者数の推移



図2 屏陽義塾の門人と出身地分布

のそれは、西讃地域を中心とする四国地方にほぼ限られていた。咸宜園は九州を中心として全国から入門者を集めたが、その系譜塾である屏陽義塾は地域限定的な漢学塾であったといえよう。もともと、咸宜園が全国から入門者を集めたのは幕末期までのことであって、明治中期になると大分県を中心とする北部九州に偏らざるを得なかった。

入門者の数と地域的分布のいずれでも特異なのが明治一九年である。同年の入門者数は突出して多く(図1)、讃岐国外出身者も一五名に及んだ。入門簿をみると、同年一・二月の入門者が三名(豊田・三野・那珂郡出身者が各一名)に限られていたのに対して、三月には那珂郡からの入門者数が一〇名に急増したうえ、同郡出身者は通年で二七名に達し、他年に比べて際だって多かった。ほかに同郡の東に隣接した鶴足郡

を占める。特に開設当初は、竹堂の近親者が紹介人となって入門者を集める傾向が強かった。その後、門人が紹介人となって、次々に新しい入門者を集めたことがうかがえる。門人が紹介人となったのは二九二例で約六三%に及ぶ。特定の紹介人が多くの入門者を集めたこともあった。小野麟吾は、明治一九年に八名の入門者の紹介人となっているが、そのうちの五名は、次にあげるように讃岐国以外出身者であったことが注目される。

- 六月入門 熊本県熊本区 当兵營第三大隊在勤 立川吉太郎 二〇歳
- 八月入門 徳島県名東郡 当兵所第一大隊在勤 多田光蔵 二三歳
- 八月入門 徳島県三好郡 門家紋市 二四歳
- 九月入門 大分県二東郡 河野規通 二二歳
- 一月入門 広島県安郡 亀川元治郎 二〇歳

小野は、のちに上高瀬村長(明治三三年就任)や香川県会議員(明治二五・三六年)となる人物である<sup>(26)</sup>ことから、当時から広い人脈を活用して入門者を集めたものと考えられる。ただ、讃岐国外出身者といっても、彼らは当時丸亀に在任していたようである。右の立川吉太郎や多田光蔵は、丸亀にあった歩兵第十二聯隊の兵營に在勤していた。ほかの者も、なんらかの理由で丸亀に滞在していたところを誘われて入門したものと考えられる。丸亀は、江戸時代後期から金毘羅参詣客の輸送や西讃物資の積み出しを担う港町として栄えた。明治二年の丸亀市街にも飲食店・古着商・旅籠屋商・料理屋などが多く<sup>(27)</sup>、商業都市として人の往来が多かったことをうかがわせる。このような土地柄であればこそ、他国出身者が入門したものと思われる。

(3) 塾生の階層と退塾後の活動

門人の階層について判明した八八例(約一八%)<sup>(28)</sup>のうち、門人あるいはその父が医師だった事例は一四、村会議員・村長は二例、教員は五例だった。大正五年(一九一六)版の『上高瀬町誌』では、屏陽義塾門人の退塾後の動向について、「諸官衙ニ仕フルモノ、陸海軍人、諸種ノ議員、弁護士、医師、諸会社員、実業家トナリ頭角ヲ顯ハシタルモノ少カラズ、且海外ニ遊学シテ偉功ヲ奏シタルモノアリ」<sup>(29)</sup>と記している。本稿では陸海軍人や弁護士となった門人を確認することはできなかったが、大正五年といえは門人やその関係者が生存していたらうから、あながち右の記述を退けることはできない。

具体的に動向を追える門人として白井要や山地善七がいる。白井は、医師の子として上高瀬村に生まれた。明治元年に柳川竹堂とその父に従って和漢の学

(2) 紹介人の傾向

から八名が入門した。逆にそれまで多かった三野郡からの入門者数が五名に減っている。また、同年六月から九月にかけて、広島・山口・熊本・福岡・大分県の出身者の入門が相継いだ。このように、入門者数が急増し、その出身地分布が那珂郡に集中するいつぼうで中国・九州地方など広範囲に及ぶ現象が併行してみられるのは、明治一九年二月に屏陽義塾が丸亀に移転したことの証左となる。

入門者を集める役割を果たした紹介人を検討することによって、屏陽義塾の性格を知ることができる。入門者五名以上の紹介人となった人物のうち、竹堂の近親者、あるいは近親者とみられる人物(柳川・戸城姓)が七五例で約一六%

を修め、同九年に上高瀬村知新小学校の三等伝習生となった。同一二年三月に愛媛県師範学校急成師範学科卒業後、四月三日に屏陽義塾に入門している。九月からは嘱任小学四等訓導補として知新小学校に勤務した。この間も屏陽義塾で学んでいたようである。同一五年七月、小学中等科教員免許状を受けている。同一九年六月には愛媛県立松山医学校を卒業し、翌二〇年二月に医術開業免許状を受けた。医師として開業のかたわら、生糸株式会社を設立し、村会議員としても活動した。大正一二年一二月に三豊郡医師会長に就任している<sup>(30)</sup>。

山地善七は、明治三年に多度郡白方村に生まれた。俊秀の素質を認められて、村費で坂出の済々学館に入学した。屏陽義塾には明治一九年七月に一四歳八月で入門している。同一二年、済々学館の教師となった<sup>(31)</sup>。大阪商船学校を卒業後、三井物産船舶部に勤務し、門司支店次長となった。日露戦役にあたり、英国に派遣されてアームストロング会社で造船監督を勤めたとされる<sup>(32)</sup>。

山地のように海外で活躍した門人は例外的であって、ほとんどの門人の活動範囲は香川県内にとどまったと考えられる。讃岐地方で顕著な活動をした人物を集めた人名辞典に掲載されている門人は、白井や山地を含めて四名にとどまる<sup>(33)</sup>。屏陽義塾は、地域指導者層の需要に応じてその子弟を集め、指導者を再生産するための基礎教育を担う場であったととらえてよいだろう<sup>(34)</sup>。

#### (4) 教育課程

屏陽義塾の教育の実際を知ることのできる史料として、明治一三年の『試業詩文』(白井家文書)が残されている。竹堂の弟元興が塾生として詩や文の試験を受けた答案用紙を綴じたものである。それぞれの詩や文の上部に、朱書きで点数が記入されている。咸宜園では、こうした試業で得た点数を積み上げ、その総点が各級に定められた点数に到達すれば昇級できるしくみをとっていた。屏陽義塾でも明治一三年当時は、咸宜園方式の月旦評が導入されていたことをうかがわせる。

「創置伺」によって明治一六年の教則をみると、九・八・七級が下等科、六・五・四級が中等科、三・二・一級が高等科と区分されて等級制は残されていた。ただし、昇級は、三月中旬・九月中旬の一統試験(大試業)に拠って実施された。授業期限は毎級六か月と決められ、四年六か月をかけて九級を修了すると定められていた。このように毎級の学習期間が決められていたことから、咸宜園方式の月旦評は採用されていなかったとみられる。

一年間の授業日数は二八五日、休業は八〇日であった。授業時間は一日八時

間三〇分、一週五一時間であった。一日の授業は、午前六時〜七時が輪読、七時〜八時三〇分が講釈・質問、八時三〇分〜九時三〇分が高等輪講、九時三〇分〜一十一時が授読、一一〜一二時が中等輪講、午後二時〜三時三〇分が初等輪講となっていた。毎月「三」がつく日は文会、「六」の日は詩会、「九」の日は書会と定められていた。文・詩・書会が設定されていた点は咸宜園と共通する。校則は入学退学規則と生徒心得二三則からなる。生徒心得の内容は、塾内での立ち居振る舞いや礼儀、飲食や衛生など生活面あるいは集団生活を送る上での注意事項など多岐にわたる。咸宜園の職任制が導入されていたようすはない。

学科課程<sup>(35)</sup>は修身・歴史・文学・詩学・物理学・地理学の六科に分けられ、各学科各級で扱う教科書が設定されていた。教科書総数は三三四四五六冊(修身一部七〇冊、歴史一部三三八冊、文学三部二冊、詩学三部六冊、物理学三部一〇冊、地理学三部一〇冊)に及んだ。これらのうち、漢籍については、「経」として四書五経、「史」として十八史略・史記・元明史略・歴史綱鑑・資治通鑑綱目、「子」として小学・蒙求、「集」として文章軌範・続文章軌範・唐宋八家文などがあつた。漢籍以外に詩集として遠思樓詩鈔・高青邱詩醇、日本史関係として国史略・皇朝史略・日本外史・日本政記・大日本史があり、ほかに博物新論・気海観瀾広義・物理全志・兵要日本地理小誌・日本地理輿地誌・輿地史略などがあつた。

明治期の漢学塾が時代に対応して、従来の経学専修のあり方から多角的学問を取り入れるように変化することが、神辺靖光によって指摘されている<sup>(36)</sup>が、右に示したように屏陽義塾でもその傾向が顕著である。しかし、生徒心得第二則には次のように記されている。

読書ハ専ラ経史ヲ熟読スルヲ要ス、古人ノ所謂其事ヲ能セント欲スルハ先其器ヲ利スト身ヲ修メ人ヲ治ムルノ道学ニアラサレハ能ハス、其故二枚々勉強シテ能ク経史ヲ熟読シ古人ノ言行ヲ理會シ、温故知新ノ理ヲ極ム古ヲ以テ今ヲ察シ、而シテ能ク国体ニ通達シ其身ヲ修メ然ル後人ヲ治ムレハ実ニ世間有益ノ事ナリ、入校ノ生徒此ニ注意シ取テ方嚮ヲ誤ル可ラス

学科課程表によれば、初等科の一年半は四書五経の素読から入り、歴史科として日本史関係の国史略や皇朝史略を読むことになっていた。中等科に昇ると歴史科に中国史書が加わるとともに文学・詩学科の学習が始まり、高等科に昇ると物理学や地理学科が加わった。このように六学科に分科して内容が多岐にわたるようになって見えても、教育の中心が「経史ヲ熟読」することに置かれてい

たことが、右の記述からうかがえる。講釈や輪読・輪講といった方法による経史中心の教育は、従来の漢学塾と大きく変わるものではなかったとみられる。

### 三 屏陽義塾の役割

#### (1) 中等教育

屏陽義塾が四七八名に及ぶ入門者を集め得た理由について、讃岐国内の中等教育機関の動向との関連で検討してみたい。

まず、中学校の動向を確認してみよう<sup>(37)</sup>。屏陽義塾が中学校となった当時、讃岐国内の県立中学校は高松中学校のみであった。明治一四年(一八八一)には県立中学校として高松・亀山・飯山の三校が設置されたが、丸亀にあった亀山中学校と鶴足郡下法軍寺村にあった飯山中学校が同一七年に廃止された。同一九年の中学校令により、地方税の支弁または補助による尋常中学校は各府県一校に限るという原則に従って、高松にあった愛媛県立第二中学校も廃止された。こうして、明治二六年(一八九三)に香川県尋常中学校が設置されるまでの約七年間、讃岐国に公立中学校が一枚もない状態が続いた。師範学校についても、明治一〇年に讃岐師範学校は伊予師範学校に吸収併せられており、同二三年に高松に尋常師範学校を設置するまで、讃岐国には師範学校がない状態であった。

この間、明治一五・一六年に三野・豊田両郡で中学設置の強い要望があがった。「小学生徒ノ其業ヲ卒ヘ進テ高尚ノ学科ヲ修メ一躍以テ専門ノ科ニ入ラント欲スル者陸続輩出スル」<sup>(38)</sup>に至り、中学校設立は急務とされた。しかし、県会はこの認めなかった。そこで、両郡は連合村会を開いて協議費を議定することに よって、同一六年一二月、理化学試験室、体操場、寄宿舎、食堂などを完備した町村立三野豊田中学校を豊田郡観音寺村に建築した。ただし、翌一七年以降の『文部省年報』には記載がないから、振るわなかったのだろう。

このように讃岐国内に、公的な中等教育機関が不十分、あるいは欠けている状態が、私立学校の隆盛をもたらしたと考えられる。明治一十九年五月に実業家鎌田勝太郎が中心となって、「実業に就かむと欲する者、又は高等の学校に入らむと欲する者に須要なる教育を施さむが為め」<sup>(39)</sup>として、中学校の役割を代替する済々学館を坂出に開設したのは、讃岐国内の県立中学校が廃校に追い込まれていく状況に危機感を持ったためであった。同年二月に竹堂が「有志ノ

需ニ応シ義塾ヲ丸亀ニ移」<sup>(40)</sup>したのも、丸亀の地域指導者層が屏陽義塾を誘致して中等教育機関を確保しようとしたためではないだろうか。

次に表1によれば、私立学校(読書学科)は明治一七年までは諸郡に散在していたが、同二一年以降の和漢学を教える各種学校は高松に集中したことがわかる。このことから屏陽義塾には競合する私立学校がなかったとみられるが、表1に含まれない三野郡財田村の忠誠舎について触れておきたい。これは、大久保彦三郎が明治一六年八月から近隣の若者のために始めた夜学校を、同一七年三月から漢学塾として開設したもので、同二〇年二月まで続いた。設立の目的は「国家有用の真士をつくる」<sup>(41)</sup>ことであった。三年間の入門者は九一名に達し、そのうちの三〇名を財田上之村出身者が占めたが、近隣の村々や遠くは徳島県や愛媛県からも集まったという。財田村は三野郡のなかでも南に位置し、同郡中央部に位置する上高瀬村とは距離があるため、財田村から屏陽義塾への入門者数はもとも多くはなかったが、明治一六年ごろからさらに減少していった。図1で屏陽義塾の入門者数が明治一六年から減少に転じたのは、財田村を含め三野郡からの入門者数が減少したことが影響している。この理由として忠誠舎に入門者を奪われたことが考えられる。屏陽義塾が明治一九年に丸亀に移転した背景には、競合する忠誠舎の存在もあったのかもしれない。

忠誠舎のように三野郡内に一時的に競合する存在があったものの、それを除くと、屏陽義塾は讃岐国西部から入門者をほぼ独占的に集めることができた。

#### (2) 漢詩教育

明治前期は漢文学習への社会的なニーズが高まったにもかかわらず、先述したように公的な中等教育機関の整備が遅れたため、それを補うかたちで漢学塾が隆盛した。それによって地域指導者層のあいだで漢詩壇が活況を呈した<sup>(42)</sup>。『香川県史』によれば、『適歩集』を残した中村三蕉や、『明治讃岐百家一絶集』を編んだ伊藤一郎など、「明治漢詩壇の層は厚かった」<sup>(43)</sup>。三野郡では、竹堂門人の白井要が十三峯吟社<sup>(44)</sup>の一員として多くの詩を残している(白井家文書)。「明治讃岐百家一絶集」を編纂した伊藤一郎は、三野郡財田村の出身で、明治一三年に屏陽義塾に入門した伊藤柚太郎の兄である。愛媛県会議員をつとめたのち、香川県選出の衆議院議員となった。同詩集には、三豊郡(明治三三年に旧三野・豊田郡を区域として成立)から七名の詩が掲載されているが、そのなかには小西松籟の名がある。松籟は、明治一四年に屏陽義塾に入門し、岡山県医学校を卒業後は帰郷して開業したが、その傍らで竹堂に漢詩を学んで

表1 香川県（讃岐国）内の中学校・各種学校

明治 (年)	数	私立学校							合計	公立 中学校					
		香川郡 (高松市)	那珂郡	三野郡		他の 郡									
				屏陽 義塾											
11	学校	2		1			2		5	1					
	教員	2		1			2		5	7					
	生徒	106・2		37			49		192・2	70					
12	学校		1		2		2		5	1					
	教員		1	1		1	2		5	6					
	生徒		89・12	36	24		42		191・12	75					
13	学校	1							2	2					
	教員	3		—					4以上	9					
	生徒	120		54					174	101・2					
14	学校	1							2	3					
	教員	7		—					8以上	12					
	生徒	362		57					419	147					
15	学校	2					2		5	3					
	教員	7		—			4		12以上	13					
	生徒	465		63			65		593	152・4					
16	学校	3	1				2		7	4					
	教員	9	6	—			5		21以上	20					
	生徒	562	40	63			150		815	255・3					
17	学校	4	1	1			3		9	1					
	教員	4以上	5	—			8		18以上	11					
	生徒	380	54	54			193		681	140					
		和漢学							普通学	英学	簿記学	数学	皇典		
21	学校	4	1					2					8		
	教員	9・1	4	1				6					20・1		
	生徒	229・11	40	45				136・9					450・20		
22	学校	4	1					3	2				11		
	教員	10・1	3	1				10	2				26・1		
	生徒	292・11	56	46				190・9	63・2				647・22		
23	学校		5					2	1	1			9		
	教員		14・1					9	1	1			25・1		
	生徒		372・25					177・8	114・6	64・12			727・51		
24	学校	7	1					1	2	1			13		
	教員	16・4	3	1				7	2	1			30・4		
	生徒	403・57	30	29				119・4	147・11	45・9			773・81		
25	学校	6	1					1	2	1			12		
	教員	14・4	5	1				7	2	1			30・4		
	生徒	358・85	83	26				89	343・16	51・8			950・109		
26	学校	4					1	2	1	1	1		11	2	
	教員	9・1		1			2	5	1	1	5		24・1	18	
	生徒	328・16		14			70	151・5	6	35・6	79		683・27	250	
27	学校	4	1				2	2		1	1		12	2	
	教員	9・1	2	1			4	5		1	5		27・1	23	
	生徒	349・21	50・9	13			111	133・3		39・18	81		776・51	364	

註1) 本表は以下にもとづいて作成した。『文部省第六年報』～『文部省第十二年報』（復刻版，宣文堂書店，1966年），愛媛県文書課編『明治十七年愛媛県統計書下』（向陽社，1912年），香川県編『香川県学事年報明治二十一年』～『香川県学事年報明治二十七年』（香川県，1889～1896年），『香川県統計書明治二十二年』～『香川県統計書明治二十七年』（1890年～1896年）。

- 2) 香川郡域の各種学校は，明治24年以降はすべて高松市域に該当する。
- 3) 教員と生徒のなかに女性がいる場合には，それぞれの数を男・女で示した。
- 4) 明治13年から同17年までの諸学校読書学科については，『明治十七年愛媛県統計書下』をもとにまとめた。同史料には明治17年に存在した学校のみが記載されている。したがって，明治13年から同16年までに廃校になった学校は表中に含まれていない。

詩作を続けたという<sup>(45)</sup>。また、『海南風雅』には全一〇八名のうち讃岐から四名の詩が掲載されているが、そのなかに竹堂門人の莊豊之祐の名がある。

明治期の三野郡(三豊郡)において、「つきあいの文化」<sup>(46)</sup>としての漢詩は重要な位置を占め、屏陽義塾はそうした需要に応える役割を果たしたといえる。

## おわりに

明治前期は公的な学校制度の発足期にあたるが、財政難を主因として中等教育機関は充足できなかった。特に香川県の場合は愛媛県に統合されていたため、讃岐国内に県立の中学校や師範学校が存在しない空白期間が生じた。競合する公的中等教育機関が存在しないことや、他の漢学塾が高松や那珂郡に偏在していたことが、屏陽義塾が西讃地方から入門者を集めることを可能にした。

初期は竹堂近親者が紹介人となつて入門者を集め、その入門者が紹介人となつてさらなる入門者呼び込みというかたちで、明治一五年(一八八二)前後に屏陽義塾は隆盛期を迎えた。明治一九年(一八八六)に那珂郡丸亀に移転した時には讃岐国以外の出身者も入門したことから、門人数が激増した。しかし、それは一時的な現象であった。総体的にみれば、屏陽義塾は三野郡を主とする西讃地方に限定的な塾であった。教育内容も表面的には六学科に分科しつつも実質は経史中心で、教育方法も講釈・輪読・輪講といった旧態依然としたものであった。門人のほとんどは退塾後も出身地域に残って、村政に携わったり、医師として開業したり、実業に就いたりといったかたちで地域指導者として活動した。このように、屏陽義塾は、地域に密着した活動を志向していた地域住民子弟に対して、基礎教養としての漢学を提供する役割を担った。

屏陽義塾を咸宜園の系譜塾であるという点からみれば、咸宜園教育方式を導入していたようすがうかがえた。明治一三年(一八八〇)には咸宜園と同様に試業が行われ、試業が点数評価されていたことを確認できた。明治一六年(一八八三)以後については、詩学科を設けてそのなかで『遠思樓詩鈔』を教科書に指定していたことや、東西に分かれた寄宿舎を完備して多くの寄宿生を受け入れていた点、詩・文・書会が設定されたことにも咸宜園の影響が見いだせる。生徒心得が比較的详细であるのも、咸宜園塾則の影響かもしれない。

しかし、課業や試業で獲得した点数によって毎月の昇級が可能だった咸宜園とは異なり、明治一六年以降の屏陽義塾ではあらかじめ定められた期間の修学

を必要とした。月旦評や職任制を採っていたことは確認できなかった。これらことから、咸宜園系譜塾としての特徴は後退していたとみなさざるを得ない。池田雅則は、近代の咸宜園の特徴として、教育内容が英学や数学に拡大したこと、位置づけが小学校での学習を経た者の進学先となっていたこと、役割が地域に根ざした人物の育成に重点化したこと、などを挙げている<sup>(47)</sup>。咸宜園の系譜塾である屏陽義塾においてもほぼ同様の傾向を指摘できる。

## 〔註〕

- (1) 千原勝美「明治初期漢学塾の様態とその性格」漢魏文化研究会編『東洋学論集 内野博士還暦記念』漢魏文化研究会、一九六四年。星野三雪「私塾『大江義塾』の教育活動とその特質」『教育学研究』四四―一、一九七七年。神辺靖光「日本における中学校形成史の研究 明治初期編」多賀出版、一九九三年。Margaret Mehl「明治時代の教育における漢学塾の役割」張寶三・楊儒賓編『日本漢学研究初探』勉誠出版、二〇〇二年。入江宏「明治前期『漢学塾』の基本的性格」幕末維新期漢学塾研究会・生馬寛信編『幕末維新期漢学塾の研究』溪水社、二〇〇三年。小久保明浩「塾の水脈」武蔵野美術大学出版局、二〇〇四年。関口直佑「明治初期における東京の私塾―同人社を中心として―」『社会学研究』一二、二〇〇八年。川原健太郎「近代の私塾における同窓生の研究―突疑塾を対象として―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』一八―二、二〇一一年。池田雅則『私塾の近代』東京大学出版会、二〇一四年。

- (2) 九州の系譜塾については咸宜園教育研究センター監修『図説咸宜園―近世最大の私塾―』日田市教育委員会、二〇一七年、一三―一、一三三頁を参照。
- (3) 鈴木理恵「漢学塾への遊学」『近世近代移行期の地域文化人』塙書房、二〇一二年。恒遠俊輔「幕末の私塾蔵春園」(葦書房、一九九二年)、小久保明浩「中津藩の家塾と私塾」(前掲註(1))、小久保書 など。

- (4) いずれの史料にも「昭和八年十二月廿二日多田羅写／原本白井要氏蔵」(／は改行を示す)とあり、昭和八年当時、白井要所蔵原本をもとに「多田羅」氏が筆写した旨が記されている。「柳川竹堂入門簿」の原本は一〇冊から成っていたようだが、写しは合冊して一冊になっている。昭和二六年版『上高瀬村史』や昭和五〇年発行『高瀬町誌』には柳川家所蔵文書として入門簿(原本)の様式や写真が掲載されている(高瀬町教育委員会事務局学校教育課町史編纂室編『高瀬文化』XV 上高瀬村史 昭和二十六年版翻刻)香川県

- 三豊郡高瀬町、二〇〇五年、一七六頁。高瀬町誌編集委員会編『高瀬町誌』香川県三豊郡高瀬町、一九七五年、六三一頁)ので、のちには白井要から柳川家に戻されたのかもしれない。いずれにしても現在原史料の所在は不明であるために、本稿では、香川県坂出市鎌田共済郷土博物館所蔵の写しを使用せざるを得ない。誤写に注意を払いながら使用することとする。
- (5) 香川県立図書館デジタルライブラリーで公開されている。同詩集を読解したものに、小野正男編・発行『幕末維新の儒者屏陽義塾々長竹堂柳川成興先生 忠恕堂詩帥の研究』(一九七六年)がある。竹堂には『尚綱堂私史』という詩文集もある(小野正男編書八頁)ようだが、未見である。
- (6) 頌徳碑は、大正一四年に竹堂門人の主唱により竹堂居宅跡近くに建立され、現存する。広瀬龍吉(旭莊の子)撰文。龍吉と竹堂の接点は不明である。
- (7) 『咸宜園日記』『林外日記』など。いずれも大分県日田市廣瀬資料館所蔵。
- (8) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典三七 香川県』角川書店、一九九一年、二三九頁。
- (9) 高瀬町教育委員会学校教育課町史編纂室編『復刻上高瀬町誌 大正五年版』香川県三豊郡高瀬町、二〇〇五年、八一頁。
- (10) 秋山惟恭(巖山)は丸亀藩儒員。丸亀藩主から『西讃府志』の編纂を命じられて安政五年(一八五八)に完成した(丸亀市史編さん委員会編『新編丸亀市史2近世編』丸亀市、一九九四年、一〇六九〜一〇七〇頁)。
- (11) 前掲註(9)に同じ。
- (12) 日田郡教育会編『増補淡窓全集下巻』思文閣、一九二七年(一九七一年復刻)、入門簿一一四頁。
- (13) 常侍史は、「定侍史」(三、四名設置され、「師家ノ書室ノ洒掃、応門・接待等ヲ支給」(井上忠校訂『武谷祐之著『南柯一夢』九州文化史研究所紀要』一〇、一九六三年、七七頁))に相当すると考えられる。外来長は、海原徹『広瀬淡窓と咸宜園(ことごとく皆宜する)』(ミネルヴァ書房、二〇〇八年)二二六頁の「外来監」に相当すると考えられる。
- (14) 前掲註(2)、三四〜三五頁。
- (15) 横井寿一郎『乾乾録』(中津市教育委員会所蔵)文久元年九月一四日条。
- (16) 日田市教育庁咸宜園教育研究センター編、発行『平成二四年度特別展廣瀬旭莊没後一五〇年記念廣瀬旭莊―東遊 大坂池田―』、二〇一二年。
- (17) 前掲註(5)、小野正男編書。
- (18) 「柳川竹堂贈位申請書」(高瀬町編集、発行『高瀬町史 史料編』二〇〇二年、七三八頁)。竹槍騒動については、石島庸男『西讃農民蜂起と小学校毀焼事件』(鹿野政直・高木俊輔編『維新改革における在村的諸潮流』三一書房、一九七二年)や香川県編・発行『香川県史 第五巻通史編近代I』一九八七年、一四〇〜一四一頁を参照。
- (19) 近代史文庫編・発行『愛媛県「学制」時代教育関係史料第三輯』、一九六三年、六頁。
- (20) 前掲註(18)「柳川竹堂贈位申請書」に同じ。
- (21) 「私学開業規則」第六七条(前掲註(19)近代史文庫編書、七頁)。
- (22) 土方苑子編『各種学校の歴史的研究』東京大学出版会、二〇〇八年、四三頁。
- (23) 愛媛県教育史編集室編『愛媛県教育史年表』愛媛県教育センター、一九六八年、四四頁。
- (24) 前掲註(18)「柳川竹堂贈位申請書」に同じ。
- (25) 前掲註(18)「柳川竹堂贈位申請書」に同じ。前掲註(4)『高瀬文化史XV上高瀬村史 昭和二十六年版翻刻』、三四五頁。
- (26) 前掲註(4)『高瀬文化史XV 上高瀬村史 昭和二十六年版翻刻』、三四六〜三四七頁。
- (27) 丸亀市史編さん委員会編『新編丸亀市史3 近代現代編』丸亀市、一九九六年、一一三頁。
- (28) 香川県内の自治体史、芝辻貞吉『天日本繁昌懐中便覧』(香川県部巻上下二冊)(印刷発売合資会社、一八九七年)、内務省衛生局編『日本医籍』(忠愛社、一八九九年)などを参照したが、紙幅の都合で詳細は省略する。
- (29) 前掲註(9)に同じ。
- (30) 磯野実編『続讃岐人名辞書』藤田書店、一九八五年、三六八頁。
- (31) 竹中龍範『坂出済々学館のこと』『英学史研究』三四、二〇〇一年、二〇頁。
- (32) 前掲註(30)、八四〇頁。
- (33) 『続讃岐人名辞書』(前掲註(30))に掲載された門人名とそれぞれの収載頁は以下の通りである。「(小西)松籟」三〇五・三二八二頁、「莊豊之祐」三六五頁、「山地善七」八四〇頁、「白井要」三六七頁。
- (34) 川原健太郎は、明治中期から大正期にかけて東京西部・三多摩地域の稲城に開かれた漢学塾奚疑塾の同窓生三六名(全門人七〇〇名以上の内)の動向を類型化して、立身出世型、地域リーダー型、教員型、その他に分け、地域リーダー型が最も多かったと指摘している(前掲註(1))。屏陽義塾の場合同様地域リーダー型が多かった点は同様であった。
- (35) 前掲註(4)『高瀬町誌』、六三〇頁。

- (36) 神辺靖光「学習の方法と塾の生活」(前掲註(1) 神辺書)、八六三頁。  
 (37) 中学校の動向については、神辺靖光「愛媛県の県立八中学校」(『明治前期中学校形成史 府県別編Ⅱ環瀬戸内海』梓出版社、二〇一三年)、前掲註(18)「香川県史 第五巻通史編近代Ⅰ」などによる。  
 (38) 「愛媛県年報」『文部省第十一年報』(復刻版) 宣文堂書店、一九六六年、六七九頁。  
 (39) 近藤末義編『淡翁鎌田勝太郎伝』鎌田勝太郎翁顕彰会、一九七四年、二九三頁。  
 (40) 前掲註(18)「柳川竹堂贈位申請書」に同じ。  
 (41) 新修財田町誌編纂委員会編『新修財田町誌』香川県三豊郡財田町、一九九二年、七四二頁。  
 (42) 猪口篤志は『日本漢文学史』(角川書店、一九八四年)で、明治の前半期に漢詩壇が活況を呈した理由として、当時の著名人がよく詩をつくったこと、私塾の成立と詩社の林立がみられたこと、漢詩を発表する出版物(雑誌・詩集・新聞など)が増えたこと、中国との交通が開けて人士の往来が盛んになったこと、などをあげている。  
 (43) 前掲註(18)『香川県史 第五巻通史編近代Ⅰ』、五三五〜五三六頁。  
 (44) 小野正男は、「明治以後、わが三豊郡内にありて、作詩せられた人びとの中、その殆どが直接、間接に、この広瀬淡窓の流れをくむ、竹堂先生の詩風の影響を受けたと見られる」として、その主だった人びとの名をあげ、彼らが十三峯吟社に属していたことを記している(前掲註(5) 一六頁)。しかし、本稿では十三峯吟社に関しては白井東岳(要)以外に屏陽義塾門人を確認できていない。  
 (45) 前掲註(30)、三〇五・三八二頁。  
 (46) 前掲註(1) 池田書、第七章。  
 (47) 池田雅則「近代における私塾の変容」(前掲註(2)、一四二〜一四三頁)。

## 【付記】

本研究はJSPS科研費JP25381029の助成を受けたものです。本稿作成にあたり、三豊市の小野健一氏と戸城晃義氏、同市教育委員会の佐柳真樹氏には情報提供や史料調査の面でたいへんお世話になりました。また、日田市の廣瀬資料館、坂出市の鎌田共済郷土博物館、三豊市の白井義人氏には貴重な史料の閲覧を許可していただきました。ここに記して深謝申しあげます。

## Education in the Heiyo-gijuku

Rie Suzuki

**Abstract:** Yanagawa Chikudo (1841-1899) established *kangaku juku* (Heiyo-gijuku: a private academy of Chinese learning) in the west of Sanuki (now in Kagawa Prefecture) after studying at Kangien (a famous private academy). His *juku* ran from 1870 to 1896. During that time, 478 students studied there, coming from the immediate neighborhood or surrounding areas. They sought knowledge of *kanbun* (Chinese learning), and became local leaders after studying *kanbun* in Heiyo-gijuku. The modern public school system was established in the 1870s. The importance of *kangaku* has been underestimated. However, *kanbun* remained the language of scholarship, literature and *kanshi* poetry throughout the 1870s and 1880s. Despite this, few secondary educational institutions taught *kanbun*. Thus, Heiyo-gijuku aimed to create local leaders by teaching *kanbun*. Kangien was famous for *gettanhyo* (a very rigorous system of ranking). Academic rank was reevaluated via regular examinations, and the revised *gettanhyo* was posted monthly. When Chikudo started Heiyo-gijuku, he introduced the Kangien educational system into his *juku*. However, in the 1880s, government regulation over private schools was tightened and it was no longer possible to maintain this type of education system. Thus, private schools were replaced by public education systems.

Key words: Heiyo-gijuku, Kangien, private academy

キーワード：屏陽義塾、咸宜園、私塾